

19世紀フランス 異能の人々 (一)

— 写真家ナダール —

Les gens extraordinaires en France au XIX^e siècle

— (1) Un photographe Nadar —

柴田道子

Michiko SHIBATA

時代が、社会が大きく変転する時、往々にしてわれわれの想像を遥かに超えるような奇想天外な人物が登場するものだ。それもそのはずで、新しい時代のうねりを先頭をきって泳ぐ人も、古い時代に固執して頑なな人も、その中間で右往左往する大多数の人間から見れば、羨望の眼差しをも含めて、まことに風変わりな人士と映るのだ。

さて、今回のわれらが主人公ナダールは、もちろん前者、すなわち時代の先端を切って泳いだ人物の一人である。そして彼の生きたフランス19世紀中葉は、まさにこの時代の大変転の時期に当たる。フランス革命、ナポレオンの帝政を経て、ひたすら近代化へと走るフランスでは、政治制度も流通経済も科学技術も一大転換期を向かえていたのだ。

さてナダールだが、本名はGaspard-Felix Tournachon (ガスパルーフェリックス・トゥルナション)、1820年に生まれて、1910年まで生きた。長命である。しかし彼のすごいのは、長命のことではない。その何とも破天荒な生き様だ。パリでジャーナリストとして出発した彼は、なぜか一時政府の密偵をやり、小説家になり、また諷刺漫画を描

き、いつも熱烈な共和主義者で、とうとう当時誕生したばかりの写真術を身につけ、写真家となった。さらに、これも当時最新の科学技術の粋である気球にのめりこみ、写真と気球とを結びつけて空中撮影なるものを初めて成功させたのも彼である。

その間、ジャーナリストとして写真家として、多くの芸術家(ボードレール、ジョルジュ・サンド、ジェラルド・ド・ネルヴァル、他多数)と親交を深め、さらに、今こそもてはやされる印象派の画家たちだが、当時、引き受け手のなかった彼らの美術展を始めて開くことができたのは、ナダールのおかげ、つまり彼の写真館でのことだった。

と、まあ一言で言えば、百花繚乱のごとき彼の人生だが、一見、様々な断片の寄せ集めに思えるその生き様を通底する何かがあったのか、それとも偶然の産物なのか。ナダール自身の書いたQuand j'étais photographe (『私は写真家である』)¹⁾と、ロジャー・グリーブスの厳密な伝記Nadar²⁾を参照しながら、これからじっくりと見ていくことにしよう。

(一)

後のナダールことフェリックス・トゥルナ

ションの一族は、父方・母方とも本の町リヨンで代々印刷・出版業を営んできた。フェリックスの父親ヴィクトールの代になって、初めてパリに進出したのだ。とはいっても、このパリ進出は、あのバルザックの主人公たちのように、「さあ、これからパリと私との対決だ」というような若々しい野望ばかりではなかったらしい。ヴィクトールは空想的社会主義者シャルル・フーリエを尊敬するような、ある種の熱血漢で、若い時にさんざん官憲と問題を起こし、ついにはリヨンにいらなくなって、パリに出たというのが本当のところらしい。1817年、40歳にしてパリに出た彼は、それでも父親の職業を継いで、その地で印刷・出版業を始めた。はじめは素晴らしい勢いで事業を拡大し、順風満帆の中、新大陸アメリカへの進出をも考えていたという。

その間、上述の通り1820年にフェリックスが生まれた。当然、父親の事業の成功から、フェリックスの幼少期の生活は豊かなものだった。しかし、幸運は長続きしなかった。1837年、父ヴィクトールが事業に失敗し、心労のためか、病に倒れて亡くなってしまったのだ。後年フェリックス・ナダールは、父のことをつぎのように語っている、

「わが父のようなお人好しは、私が司教になるために生まれたのではないのと同じくらい、生来商売には向かなかったのだ。あまりにもお人好しで、人を信用しすぎる彼は、世の中に泥棒というものがいることすら考えてもみなかった。彼の家は、私が生まれた時にはすでに衰退の極みにあったのだ。」³⁾

フーリエ主義者の父親と商売とは、本来矛盾する組合せだったということと言いたかったのか。それにしてもフェリックスが生まれた時にすでに父の事業が傾いていたというのな

ら、事業の拡大もアメリカへの進出も、ヴィクトールの空想世界の中のことだったのだろうか。奇妙な逸話が残っている。亡くなったヴィクトールが妻に残した一枚の紙片があり、そこにはニューヨークの某書店名とその社長の名前が書き込まれていたという。

いずれにしても、17歳のフェリックスが、長男として一家を支えていかなければならなくなった。彼は絶望したのだろうか。とんでもない！むしろ彼はこの強制的な自立を心から喜んだ。これからは好きなことをして生きていける。手始めに彼は医学の道を進もうとしたようだ。なぜ？父の死と関係があるのか。よく解らない。そして医学への志の時期は、ほんの短い間だった。すでに1838年には、パリの出版社Journal des dames (「婦人新聞」)に組版工として入社している。やはり父祖の血が導いたのか。いずれにしても、これがジャーナリズムと彼との最初の接点だった。なぜなら、生来の文筆のさえを見込まれて、入社まもなく、彼は組版の仕事の合間に、穴埋め記事の劇評を書くことになったのだ。彼は書きまくった。Journal des damesが潰れた後も、1939年のla Revue et Gazette des théâtres (「劇場新聞」)を手始めに、つぎからつぎへと出版社を移り、劇評はもちろん、モードや風俗記事まで器用にこなした。動きが速く、好奇心旺盛で、人好きもし、決断力もある彼は、生来ジャーナリストに向いていたのだろう。その筆名は高まり、前述のボードレールやネルヴァル、アルセーヌ・ウーセ、ゴーチエ、バルザック等ともこの時期に知り合っている。

この辺で、1939年前後からフェリックスが使い始めたナダールという筆名についても触れておこう。仲間内のスラングとして、言葉を短くしたり、語尾に決まった言い回しを必ず付けたりする話し方は、いつの時代でも

あることだ。当時、ある仲間内で語尾にdarを付けるやり方が流行っていたそうだ。Felix Tournachonの替りにFelix Tournadarというわけだ。このTournadarがさらに短くなってNadarとなった。ところで、ある仲間内とはどんな仲間だったのだろうか。ロジャー・グリーヴスは、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』の一節から、この仲間を悪党・ごろつきの連中と推察し、つぎのように述べている、

「フェリックスにとって、同時代の他の若い芸術家同様、悪党とは社会的アンチテーゼ、あるいは反逆のメタファーを提示していたのだ」⁴⁾

これはかなり納得のいく説明だろう。すでに熱烈な共和主義者であったフェリックスは、ルイ・フィリップの七月王制下にあつて、反逆の精神をこのナダールという名前に込めて使いはじめたのだ。

さて、話を元に戻そう。新聞や雑誌に記事を書く一方で、ボヘミアン仲間の小説家アンリ・ミュルジュール等の影響か、1843年には、ナダールは一編の小説をものしている。現在では全く忘れ去られてしまったLa Robe de Déjanire (『デジャニールのドレス』) という題名のこの小説は、一部に評価された社会主義的なテーマを含みながらも、やはりバルザックの亜流に終始していて、作品そのものは凡庸であつたらしい。しかしその後も彼は書き続け、1948年までに11本の短編小説を世に送り出した。いつもうまくいくとは限らないのが人生か。これらの作品もそれほどの評価は受けなかったようだ。

しかし、こんな事ぐらいでへこむナダールではない。糊口をしのぐために、相変わらず新聞・雑誌に記事を書いていた彼

は、かの有名なCharles Philipon (シャルル・フィリポン) と邂逅するのだ。フィリポンといえば、1830年に政治諷刺誌「カリカチュール」を創刊し、さらに1832年には日刊紙「シャリヴァリ」を創刊して、縦横無尽に時の政府や社会を批判し、諷刺画というジャンルの一時代を築いた大人物である。政府の弾圧による度重なる禁固、莫大な罰金にもめげず、日本でもよく知られているグランヴィル、ドーミエ、ギュスターヴ・ドレらの諷刺画家たちを世に出した彼の功績は偉大である。そのフィリポンが、なんとナダールの文筆ではなく、諷刺画家としての才能を発見したのだ。今度は画家？それにしても、ナダールの何たるマルチタレントぶりか。

その話にはまた後ほど戻るとして、ここで、「政府の密偵」問題をはらむポーランド独立運動とナダールとの関係を少々述べておかなければならない。ナダールは都合二度、この独立運動に参加するためフランスを出発している。一度目は1848年3月、ポーランドの独立を阻むプロイセンとロシアを討つべく、約五百人の義勇兵の一人として出発した。プロイセンとロシアを相手に、たかだか五百人とは、そもそも無謀な企てだった。自国の二月革命の熱気の中で、彼らは自由の恩恵を他国にも広げる夢を見たのだろうか。それとも、フランスの七月王制に失望しきっていた共和派の、他国への浅薄な同情心だったのか。いずれにしても、ナダールの言によれば、ポーランドからの亡命者あるいは亡命者の息子たちが三百人、そしてフランス人二百人という陣容で、彼らはフランスを出発したのだ。この義勇軍の費用の一部が、二月革命で誕生した第二共和国臨時政府から、言い換えれば、その政府の首班に任命された、かの有名な文豪ラマルチーヌから出たのは事実のようだ。

「ストラズブルグまでは、日に一フランと宿泊券が支給され、その後は、自分たちで何とかせよ、ということだった」⁵⁾

と、ナダールも自嘲げみに語っている。ともかくにも、こうして彼らはプロイセン領のミンデンという町まで進軍した。そしてそこで、全員が捕らえられてしまった。その後は、プロイセン領の各地で監禁され、ついにはフランスへの強制送還。よくも殺されなかったと思うぐらいだが、これには、先のフランス政府首班ラマルチースが、ヨーロッパ列強に向けて発した宣言書が、良くも悪くも関係しているのかもしれない。すなわち、フランスの不拡充宣言だ。良い関係とは、この宣言のおかげで、彼らの軍はフランス政府の派遣した軍とは見なされず、全員が命拾いをしたということ。悪い関係とは、ではなぜ、最初に政府は金を出したのか、何のために彼らは苦勞してプロイセンまでやって来たのかということだ。現実的には、フランス政府の変節しか考えられない。その証拠に、1848年5月には、パリで、政府がポーランド独立運動に援助を拒否したということで、労働者による大規模なデモ行進が行われ、ついには暴動にまでいたっている。

こうして、ナダールの第一回目のポーランド独立運動への旅は終わった。ナダールは失望したのだろうか。もちろん、屈辱感と言いやうのない怒りに囚われたにちがいない。しかし、彼のこの行動は、体の底から共和主義者であった彼のやむにやまれぬ思いから発したものであり、その意味で彼は後悔はしなかったように思われる。ストラズブルグを発ち、いよいよ敵地に乗り込む時に、彼がしたためた手紙は、そんな彼の心情をよく物語っている、

「私としては、ポーランド国民への同情を別にすれば、ポーランドのためというより、ポーランドが具現する思想のために行軍しているのだ」⁶⁾

ポーランドが具現する思想とは、民族の独立と自由、すなわちナダールの考える共和主義そのものに相違ない。

そして第二回目の出発は、何とナダールがプロイセンからパリに帰国した（恐らく、六月初旬だろうと思われる）直後に起こったのだ。オペラ座のそばにあるディバンという文学・政治カフェで、例によってプロイセンでの出来事をとうとうと話していたナダールに、一人の小柄で、痩せた人物が近づいてきた。その人物の名はエッツェル、著名な編集者であり、当時のフランス外務省の官房長官も務めていた。その彼が、「話があるから、ちょっと庭に出ないか」という。話とは、ポーランドに対して、今度はロシア軍が動き出したという。その情報を確かめるべく、今一度、今回は政府の密偵としてロシアへ赴いてほしい、というものだった。そして即座に旅費の千フランが手渡され、さらに月々六百フランが支給されるという。ナダールは半分夢見ごちだったが、持ち前の熱い血がいきよにたぎった。今度こそ、政府の一員として、ポーランドを助けることが出来る！快諾した彼に、エッツェルは続けた。フレデリック・アークという偽名で、画家として潜入するように、そして手紙という形で、エッツェルに個人的に報告書を送るようにと。

ナダールがいつ出発したかは、定かではない。だが六月十一日には、すでにケルンにいたことは確かだ。そこからベルリンを経て、ポーランドのシュテチンに到着した彼は、その地のフランス領事に面会した。ロシア軍の話をする、⁷⁾「ロシア軍が動いている

だって！幻想でも見たんじゃないか」と、領事は一笑にふした。実は、この領事はエッツェルの企みを知っていたのだ。エッツェルの企み？そう、エッツェルは外務省の高官として、ロシア軍が動いていないのを百も承知していた。では、なぜナダールを派遣したのか。エッツェルは、カフェ・ディバンでナダールの熱弁を耳にした。そして、この純真な熱血漢をそのまま放置しては、命が危ないと直感したのだ。というのも、1948年6月という時期のフランスは、二月革命の熱気が冷めやり、ルイ・フィリップの七月王制に対して、共に手を携えて闘ったはずの臨時政府側と労働者側とがまっこうから対立する構図になっていたのだ。この構図の中で、ナダールが労働者側に付くことは火を見るよりも明らかだ。そしてこの段階で、最終的には労働者側が敗北し、弾圧されるということを、エッツェルは見越していたのだ。「この青年をフランスに置いておいては危ない。長い間国外にいた彼が、フランスの現状を認識する前に、一刻も早く再び国外に出さなければならぬ。」そこで、エッツェルは大芝居を打ったのだ。彼の見込み通り、6月23日から26日にかけて、政府側と労働者側とはすさまじい市街戦を繰り広げ、ついに労働者側は政府軍のカヴェニャック将軍によって鎮圧された。銃殺された労働者は千五百人に上り、逮捕された者の数は二万五千人になったという。しかもその大半は死刑になるか、アルジェリアへ流刑された。

エッツェルの大芝居、これを知らなかったのは、当のナダールだけだった。なおも旅を続けた彼は、7月20日に、ポーランド国境に近いロシア領の港町カーニングラードに到着した。案の定、ロシアが軍を結集している様子は微塵もない。ナダールは大真面目に、ロシア軍動くの情報は偽りだとエツ

ェルに手紙を書く。彼は密偵としての使命を全うしたと考え、次の指令、すなわち「パリに帰って来い」という指令が、エッツェルから届くのを首を長くして待った。彼がパリに帰りついたのは、8月も終わりの頃だった。

最後までナダールは自分の使命を信じきっていた。露もエッツェルの大芝居など疑わなかった。それは、日頃の彼の直情型の心情を知れば納得もするが、ではなぜ、エッツェルは面識もなかったナダールを救おうとしたのか。いや、編集者だったエッツェルは、新聞や雑誌に記事を書きまくっていたナダールの名前ぐらいは知っていたかもしれない。しかし、それにしても深い付き合いなどなかったはずだ。謎は深まるばかりだが、考えられるのは、やはりナダールの性格にあるのではないかということだ。今回の「密偵」事件でもうかがえるような、ナダールの馬鹿が付くほどの純真さ、その直情径行、これは一目彼を見ればわかるし、一度彼の話を聞けばわかるというしろものだ。エッツェルは、そんな彼に、人間としての何らかの価値を、いやもっと単純に強い好意を抱いたに相違ない。そこからすべてが始まったと、私には思えてしかたがない。いずれにしても、あり得なかった「密偵」旅行を終えたナダールは、また元の文筆生活へと戻った。

(二)

さていよいよ、諷刺画家ナダールの登場だ。前述したように、この新しい展開には、かのシャルル・フィリポンが大きく関わっている。確かに七月王制下では、フィリポンの下にフランスのすべての偉大な諷刺画家たちが行列をなした感がある。しかしフィリポンは、この時期、すなわち1848年・1849年頃、新境地を開きたいと思っていた。若く、新鮮な視点を持つ諷刺画家たちをまったく新たに探し

出し、Journal pour rire (「面白新聞」とも言おうか) を創刊しようと考えたのだ。そうしてリクルートされた一連の中に、17歳の学生であったギュスターヴ・ドレもいて、29歳のナダールもいたというわけだ。そしてフィリポンの新たな闘争目標は、もちろんナポレオン三世。七月王制下のルイ・フィリップ同様、まやかしの王位篡奪者は、これまた前者同様、フィリポンの嘲笑にうってつけの容貌をしていたのだ。ここで、「カリカチュール」紙に何度となく載せられた洋梨頭のルイ・フィリップの諷刺画を思い出していただきたい。こんどのナポレオン三世は、小さな顔に不釣り合いなほど巨大な、真っ黒い口ひげを生やしているのではないか。フィリポンは若かりし日の闘志を再び燃やしたに違いない。

しかし彼の下には、彼以上に激烈な男が一人いた。それがナダールだ。ナダールは「面白新聞」の第一号紙面から、自らの政治信条を直球で投げつけた。当時の革命的共和主義者たちの言葉で言えば、「democ(démocratie) et soc(socialisme)」である。これには、さすがのフィリボンも手を焼いたらしい。政府による発刊禁止を避けるため、何とかナダールをなだめようとするが、ナダールもナダールである。フィリポンの不在を突いて、内緒で紙面にやっかいな諷刺画をすべりこませてしまう。それを知ったフィリポンはつぶやく、

「どんな場合にも、毛布を自分の方に引っ張ってしまう、あのリヨン人の癖だ」⁷⁾

とはいえ、フィリポンはナダールの政治信条も直情傾向も、そして彼の才能も愛していた。その諷刺画家としての彼の才能が、最大限に発揮されたのが、有名な『パンテオン・ナダール』である。

さて、その『パンテオン・ナダール』だが、これは一種の肖像諷刺画である。しかしその内容は、当代の有名人千人を四枚の石版画に一挙に描く、すなわち一枚の画面に約二百五十人を描きこむという稀有なものであった。一枚の画面の大きさが縦75センチ、横1メートル4センチという石版画にしては巨大なものであったが、それにしてもその画面の中に250人も的人物を描きこむというのは、しかも写実を踏まえながらの諷刺画として描きこむというのは、並大抵の技ではない。実際にはどのようなものかといえば、大画面の左端に彫像姿のジョルジュ・サンドが描かれ(彼女だけは諷刺化されていない)、彼女を先頭に250名以上の男たちが四重の列を成して全身像で描かれているのだ。多くがフロックコートを着ているが、太っちょ、痩せっぽち、のっぼ、ちび、片眼鏡に、帽子、ひげ、はげ頭も珍しくない。まさに、見る者を圧倒する迫力だ。

1954年、この石版画の一枚目が完成して書店の店頭と並べられた時、道行く人々がこの絵の前に群がり、「これは誰だ、こっちは誰々だ」と人名の当てっこをして大評判になったというのも、想像に難くない。まったく人の度肝を抜く、ナダールらしい企てであった。もうお解かりだろうが、タイトルの『パンテオン・ナダール』とは、ナダールが讃える現代のパンテオン(ギリシャ語の万神殿)であり、もちろん今もパリの街に聳えるあの偉人霊廟「パンテオン」を意識したものだ。しかしこの大仕事は、ナダールを一躍有名にしたが、金銭的には彼を豊かにはしなかったらしい。なぜなら、すごい労力に見合うかなり高価な値段が付けられ、大評判を取ったわりに、それほど作品が売れなかったからだ。そのせいか、この企ては四枚の内の一枚目が出ただけで終わってしまった。ただ

し、この企てのおかげで、彼は生涯の仕事につながるものと巡り会った。写真術である。

やっと、写真家ナダールの登場だ。今では、ナダールといえば写真家、写真家といえばナダールと言われるほどだが、すでに見てきたように様々な職業の後で、彼が写真家としてデビューしたのは、1854年、34歳になるうとする春のことであった。ここでもまた、なぜ唐突に写真家なのか、という疑問が湧いてくる。

それについては、1854年という年に着目していただきたい。上記の『パンテオン・ナダール』が出版された年だ。そう、ナダールは一枚の画面に250人もの肖像画を一挙に描きこむのに、当時実用化されつつあった写真術を利用したのだ。まず、それぞれの人物の写真をとっておいてから、あるいはすでに写真になっていた人物もあったろうが、それを見ながら諷刺肖像画を創作していったというわけだ。ナダールは語っている、

「生まれたばかりの写真術が、少なくとも私の無能さを助けてくれた…」と⁸⁾。

写真術、最初は半信半疑だったが、やってみればおもしろい。それに何より目新しい技術だ。のめりこみやすいナダールが夢中になったのも、うなずけるというものだ。ここで、当時の写真術について簡単に俯瞰しておこう。

1827年、フランス人ジョゼフ・ニセフォル・ニエプスによって、世界最初の写真が撮影された。しかしこの写真は、強い日差しの下8時間もの露出が必要で、しかも画面も不明瞭、とても実用化できるしろものではなかった。これを改良したのが、ニエプスの研究に協力していたルイ・ジャック・ダゲールである。1839年、彼は有名なダゲレオタイプ

を完成させた。ダゲレオタイプとは、銅板にヨウ化銀を乗せたものを露光するという方式で、こののおかげで、露出時間が1～2分に短縮された。おまけに画面は驚くほど鮮明だ。やっと人物撮影が可能になった瞬間だった。同年、フランス化学・芸術アカデミーの席上で発表され、ただちにフランス政府がその特許を買い上げたダゲレオタイプは、以後、世界的なセンセーションを巻き起こして、肖像写真の一大ブームを招いた。

その後、様々な人々の研究で写真術は飛躍的に進歩し、ナダール登場の時代には湿式コロジオン法と言われた、金属板ではなくガラス板に撮影する方法が普及していた。この方法は、ダゲレオタイプにはない複製の可能性を持っていたため、瞬く間にダゲレオタイプを駆逐してしまった。

ところで、眠る暇もないほど忙しかったナダールは、いつ、誰に写真術の手ほどきを受けたのだろうか。現在と違って化学的な処理の多かった写真術については、いくら手だれの肖像画家といえども、そう簡単に扱えるものではなかったはずだ。まず考えられるのは、パリに出て来たばかりの従弟ジルベール・ランドンの存在だ。この従弟の趣味が写真だった。ナダールはこの従弟から、初歩的な技術を教わったらしい。ただし、日曜画家ならぬ日曜写真家の腕前はあくまで素人にすぎない。つぎに彼は、ベルッシュ、カミーユ・ダルノー等、『パンテオン・ナダール』に写真で協力してくれた人々から写真術の秘密を伝授された。そして1854年2月、何と『パンテオン・ナダール』が発売される直前に、ナダールは当時住んでいたサン・ラザール通り113番地で、早々と写真スタジオを開いてしまったのだ。何という決断の速さ、いや替わり身の速さ。諷刺肖像画家から写真家へ、卒然と転進してしまったのだ。しかもそ

の二・三年後には、パリでも屈指の写真家となったというのだから驚く他はない。

持ち前の集中力、熱中癖がそうさせたのだろうが、それよりも、いかに写真を芸術に近づけるかという彼の意欲が後押ししたのが、最大の要因だと私は見ている。というのも、当時の写真について、こともあろうに、ナダールの親友の一人であるボードレールはつぎのように語っている、

「写真工業が、…画家に成り損ねた者たち皆の避難所であった…」⁹⁾

「芸術の中に闖入してきた工業は芸術にとって最も不倶戴天の敵となる…」¹⁰⁾

「従って写真は其の本当の義務に戻るべきなのですが、その義務とは、諸科学、諸芸術

の下婢となること、それも印刷術や速記術同様、きわめて慎ましい下婢になること…」¹¹⁾

これは、ボードレールがある美術批評の中で述べた言葉だが、いかにも手厳しい。ここまで言われて発奮しないナダールではない。そこで写真を芸術にするために、ナダールがどんな写真の取り方をしたのか、少々長くなるが見ておこう、

「ナダールのアトリエ、それは庭だった。そこでは同じ儀式に従って、いつも同じことが為される。客が到着すると、女中がサロンへと導き、主人に来客を告げに行く。すぐにナダールがやって来るが、その態度は愛想がよく、寛いだ様子で、なおかつ礼儀正しい。彼は客に挨拶をして、椅子に腰を下ろす。客と主人は様々な話をする。クリミア戦争について、写実主義について、ボードレールに

よって為されたエドガー・アラン・ポーの翻訳について、ポーマルシェに関するルイ・ド・ロメニーの本について、ラムネーについて、オッフエンバッハの新しい芝居について、気球の操縦について、ジェラルド・ド・ネルヴァルやハイネの死について、チエールの事故について、…そしてすべてについて。ナダールはすべてについて話し、しかも巧みに語る。その結果、写真家と客との間には、いつしか共感の情が生まれる。

この間、助手たちは庭の一角に背景用の布を垂らし、白のリンネル製の反射傘を据え付ける。暗室では、助手のプラエトリウスがコロジオンの塗られたガラス板に感光液を塗布する…。それら全ての準備は、時間的には正確に、しかも客の知らない間に為される。客はサロンで寛いでお喋りをしているばかりだ。

いよいよナダールが庭で撮影を始めることを告げる。極々自然に、それまでの会話を続けながら、予め選んでおいた場所へと移動する。背景用の布の前で座っているか、立っているかする客に対して、写真家はすぐに、最近知ったばかりのある逸話を披露する。例えば、アルコール中毒のおもしろい話だ。(…)話しながら、「失礼」と言って、彼は客のコートのを直し、腕の位置を換える。助手たちが、彼の身振りで背景の布を前の方にずらしたり、反射傘の向きを変える。相変わらず話は続く。被写体が画面の中心にくるように、写真家はカメラの後ろに付いたサージ製の布の中に頭をすっぽりと埋める。「顔を少しだけ私の方に向けてください。ありがとうございます」話しが佳境に入り、客が笑っても、ナダールは動かない。彼は待っている。そして客

の顔の表情が静止状態に戻った時、彼は静かに言う。「動かないで」…¹²⁾

ナダールはゆっくりと時間をかけて客の緊張感を取り除き、共感関係を築き上げ、客が相好を崩してもなお待ち続ける。そして客の顔が笑顔から、寛いだ普段の顔になろうとするその瞬間にシャッターを下ろす。ボードレールの指摘する写真術の宿命である被写体の表面的な真実ではなく、内面的な真実により近づくために。すなわち人物の外表面を描いて、その内面をもにじませる肖像絵画と同じことをやろうとしたのだ。

それでは、実際に彼の作品を一つ二つ見てみよう。まず最初に、写真を毛嫌いした親友のボードレールのポートレート。ボードレールの作品集には必ずといっていいほど掲載される有名な写真が6枚残されている。いずれも細身で、ダンディなボードレールの姿だが、その神経質そうな面差し、それでいて挑戦するように見つめ返す強力な眼差しには、自らの我執を何とか抑え込もうとして抑えきれない彼の苦悩がありありと見てとれる。ただ一枚、椅子に腰をかけ、頬に手を当てている写真は、その苦悩に疲れたのか、眼の力が弱まり、やや憔悴した面持ちだ。部屋に一人である時のボードレールは、こんな様子だったのだろうか。つぎに、これもよく知られた自殺の数日前のジェラルド・ド・ネルヴァルの写真。椅子にゆったりと腰を下ろし、いかにも静かに寛いだ様子で、彼を苦しめたはずの狂気の兆候など微塵も見えない。むしろ優しく、思慮深そうなその面差しに、ほっとするような安らぎを覚える。しかしその遠くをじっと見つめるような眼差しこそ、彼の狂気の源であった幻視に他ならないのかもしれない。

このようにナダールの肖像写真は、見る者の想像力をどこまでも駆り立ててくれる。背

景という夾雑物が全く無く、あくまでその人物だけに収斂された画面を前にして、実際、われわれはその写真を読み解こうと夢中になるのだ。さしものボードレールも、このナダールの技だけには脱帽したに違いない。だからこそ被写体にもなったのだろう。

こうした写真をとれるナダールに人気がないわけではない。1860年には、当時のパリ随一の繁華街キャピシーヌ大通りにスタジオを構えた。そのスタジオは四階建ての大きなビルの上層二階を占め、大通りに面した前面は総ガラス張り、その上にナダールという巨大な文字がガス燈で浮かび上がるようになっていた。そのスタジオで彼はヴィクトル・ユゴーを、ツルゲーネフを、エミール・ゾラを、テオフィル・ゴージェを、エドゥアル・マネを、ロッシニを、ベルリオーズを、オッフエンバックを、さらにはサラ・ベルナルを撮影した。もはやフランス写真界の第一人者になったのだ。

(三)

この辺で、彼の写真術と密接な関わりを持つ気球への情熱についても語っておかなければならない。1857年、ナダールは全くの偶然から気球乗りとして有名だったゴダール兄弟の気球に乗ることになった。その偶然とは、近所を散歩中のナダールの処へ、一人の見知らぬ男が近づいて来たことに始まる。男はゴダールだと名乗り、気球のゴンドラと一緒に乗ってこないかと頼んできたのだ。見るとそばには、大きく膨らんだ気球が紐で繋がれ、今にも飛び立とうとしている。ゴダールによれば、何人もの通行人に同乗を頼んだが、ことごとく断られたという。ゴダール兄弟は、気球の安全性と普及を図るために、一般人を同乗させて、評判を広めようと考えていたのだ。ナダールは即座に承知した。鳥の

ように空を飛ぶという夢は、イカロス以来の全人類の夢ではないか。あのレオナルド・ダ・ヴィンチだって必死になって模索したではないか。こんなチャンス逃す彼ではなかった。

ところで、この気球という19世紀の夢の乗物、今では珍しくなったこの乗物についても、少々説明しておかなければならない。長年、人類に夢見られていた気球が本当に空に浮かんだのは、1783年、南フランスのアノネーという町での出来事だった。以前から気球の実験を繰り返していたモンゴルフィエ兄弟が、その年、ついに人類初の気球の打ち上げに成功したのだ。

「1783年6月5日、アノネーの町の広場から、布と紙で作られ、底の部分に空気を暖めるためのコンロを備えた直径10メートルあまりの気球が打ち上げられ、およそ千メートルの高さにまで上昇した後、四キロほど離れた地点に落下した。」¹³⁾

一般的に熱気球と呼ばれる、熱せられた空気が常温の空気よりも軽いことから浮力を得るしくみの気球の、最初の成功の描写だ。その後、熱せられた空気の代わりに水素を使う水素気球なども発明され、同年11月には有人飛行も実現された。しかしこのような夢の乗物も事故は多く、人々は成功には喝采を送るが、自分で試してみようという勇気までは持ち得なかったというのが実情のようだ。

だが、ナダールはちがう。同乗を即座に快諾した彼は、初飛行の感覚をつぎのように述べている。

「いかなる人間の力も悪の権力も及ばない、慈悲にみちたあたたかい広大無辺の沈黙の空間に吸いこまれ、そのときまで知ることのな

かった魂と肉体との完全な充足を享受しつつ、自由にかつ静かに、人ははじめて本当の生を生きていると感じるのだ。」¹⁴⁾

彼の高揚した、しかし確かに何か新しい感性をつかんだような感覚が、見事に表現されている。この時から、ナダールは気球飛行にのめりこみ、ついには「巨人号」という容積六千立方メートルもの大気球まで作らせることになる。しかし、衆人環視の中で飛び立った巨人号は、無残にも落下してしまった。自信満々で同乗させた妻も他の搭乗員も全員が負傷するという散々な結果だった。確かに彼は、この気球に異様に熱中し、肖像写真で得た多額の利益を蕩尽しつくしたと言われているが、転んでも、いや落下してもただでは起きないのが彼の本領だ。写真と気球とを組み合わせ、世界初の空中写真なるものを構想したのだ。

しかし、構想は素晴らしかったが、実現は困難を極めた。ただ気球に乗って、いつも通りに写真を写せばよいと考えていたが、何度やっても写真は写らない。

「なぜ映像が現れないのか。なぜ黒い煤の霧がかかったようなネガしかできないのだろうか。半透明のくすんだネガ、闇夜のように真っ黒のネガがわたしにとり憑いてはなれなかった。呪われているかのようだ。」¹⁵⁾

幾度も現像液を濾過し、交換し、薬品を変えても無駄だった。資金も底をつき、屈辱にまみれ、絶望にとらわれたナダールは、最後の賭けにでる。

「もう一度、もう一度だけ挑戦してみよう！ 手腕のかぎりを尽くし、意思のすべてを傾注して最後の実験をやってみよう。」¹⁶⁾

こうして最後の飛行に飛び立ったナダールだったが、やはり無駄な戦いだった。いつもにまして遅くまで飛び続けたが、やがて陽は落ち、気球はパリ郊外のプチ・ビセートルという谷間に降下した。万事休す！操縦していたゴダールが、気球のガスを抜こうとしたその瞬間、諦めきれないナダールが叫んだ。「待ってくれ！」その晩は寒かったため、朝までに気球のガスが抜け出るおそれはなかった。もう一度、もう一度だけ、明日の朝、試してみたい。気球をあたりの木にしっかり繫留して、その夜は、ゴダールもナダールも野宿することにした。そして朝、目覚めしてみると、気球のガスは抜けてはいなかったものの、逆に夜の冷気はガスを凝縮してしまい、気球は小さくなり、ぐにやりと見るかげもない形に変形していた。「はたして飛べるのだろうか。」とにかく重量のあるものは、すべて捨てた。ゴンドラの吊り籠もとり外して、枠だけにし、ナダールは身につけていた衣類も靴も捨てた。下着だけになり、それでも自らの贅肉を嫌悪しながら、カメラを握った。

「とうとう80メートルほど上昇することができた。レンズの蓋を開ける。すぐさま閉じる。大声で叫ぶ。降下！地面に引き降ろされると、一目散に宿屋にとびこみ、胸躍らせて現像にかかった。やったぞ！なにかが写っている！」¹⁷⁾

ついに、世界初の航空写真の撮影に成功した瞬間だ。いつもよりもよほど条件の悪く中での撮影なのに、なぜこの時だけ写真が写ったのか。その秘密はごく簡単なものだった。いつもは、上昇するにつれて膨張する過剰な硫化水素ガスの爆発を防ぐために、ガス抜きホースを全開にして飛行したのだが、この時は気球が浮上するか否かの瀬戸際だった

ため、ガス抜きホースを閉めたまま飛行したのだ。すなわちそれまでは、ガス抜きホースから硫化水素ガスが勢いよくガラス板の水銀沃化物の上にふりそそぎ、水銀沃化物の反応を無にしてしまっていたのだ。

こうして、今では当たり前の中からの都市像、俯瞰図がわれわれに与えられた。その後ナダールは、今度は一転して、日の光の一切ささない地下空間の撮影にも成功するが、その苦労話はここでは省いて、そろそろ結論を急ごう。

一体、彼の人生とは何だったのか。その時々欲望のまま、偶然的な断片の寄せ集めにすぎなかったのだろうか。確かに写真家として以外は、ジャーナリストとしても、作家としても、諷刺漫画家としても、気球乗りとしても、彼は一流とはいえない。あたら、薄っぺらい才能を騒々しく浪費しただけなのだろうか。いや、彼こそ19世紀フランスを生きた、さらに言えば体現した人物に他ならないと、私は思う。なぜなら、19世紀フランスが革命の世紀なら、彼は常に革命側にいて、徹底的に共和主義者であったし、19世紀が科学の世紀の始まりであるなら、彼は写真や気球という先端科学の申し子だった。さらに19世紀がジャーナリズムの揺籃期なら、彼はその野を駆け抜けたし、19世紀の芸術がロマン主義的であるなら、破滅的で魅力的な詩人たちの傍らには、常に彼がいた。ナダールとは、19世紀フランスの夢と創造を追い求め、それを現実的には達成できぬまでも、それを追い求める想像力と感性を十全に持っていた、そういう人間ではなかったろうか。まさに、19世紀フランスを代表する異能の人といえる。

注

- 1) Nadar, *Quand j'étais photographe*, Actes Sud, 1998
翻訳『ナダール 私は写真家である』, 大野多加志・橋本克己編訳, 筑摩叢書345, 筑摩書房, 1990年が存在するので, 引用はこの翻訳を利用させていただいた。
- 2) Roger Greaves, *Nadar ou le paradoxe vital*, Flammarion, 1980
- 3) *ibid.* p.19~20
- 4) *ibid.* p.52
- 5) *ibid.* p.102
- 6) *ibid.* p.104
- 7) *ibid.* p.123
- 8) *ibid.* p.163
- 9) 『ボードレール全集Ⅲ, 美術批評 上』, 阿部良雄訳, 筑摩書房, 1985年, p.307
- 10) 同上, p.308
- 11) 同上, p.308
- 12) *Nadar ou le paradoxe vital*, p.183~184
- 13) 『19世紀フランス 夢と創造』, 小倉孝誠著, 人文書院, 1995年, p.214
- 14) *Quand j'étais photographe*, p.22
- 15) *ibid.* p.32
- 16) *ibid.* p.33
- 17) *ibid.* p.36